

宇田雄一「古典物理学」

はありません。学者や技術者を養成するための教科書ではありませんが、物理学の本としても本格的な専門書になっています。私は、物理学や数学の専門家にも本書を読んで欲しい、と思っています。自分が直面している専門的な問題を何のために解くのか、それが解ければ何が分かるのか、自分が本当に知りたいのは何なのか(元になる問い合わせ)を考える上での参考になると思います。本書は、認知心理学で「物理学は如何に認識するか」を研究する時の標本にもなるでしょう。また私は、様々な分野でこれから解説書・報告書・評論を書こうという人にも本書を読んで欲しい、と思っています。「宇田スタイルでまとめた」と言われるようになれば本望です。

本書を書いた目的は

この本が世の中に存在しなくてはいけない本だから、私は本書を書きました。存在しなくてはいけない本を存在させるのが目的です。また、この行為を通して公共の福祉に寄与することにより、私の人生を有意義なものとすることや、他者に広く知られること(天才の証を立てること)によって、自分の名誉欲や自尊心を満足させることも目的です。私個人の今後の活動のための経済的基盤を築くことも目的です。しかし私は、名誉欲、自尊心、経済的必要性を、本書の記述を如何なるものにするかに反映させてはいません。如何なる記述を取るかは、純粹に、如何なる本が存在しなくてはいけないかによって決めました。結果的には、そうすることによって名誉欲、自尊心、経済的必要性も、より良く満たされるだろうと信じています。存在しなくてはいけないかどうかは、私の良心と価値観に基づき判断しました。その法的根拠は、日本国憲法に保障されている、良心の自由(第19条)と言論出版の自由(第21条)です。我利追求の手段ともなっていることの法的正当性は幸福追求の権利(第13条)です。我利追求の方は、これによって初めて公共の福祉に参加する自己を維持できるので、我利のみの追求でもありません。公共の福祉への寄与の必要条件として、既存の出版物があればこんな本は必要ない、と言われるような本ではないこと、これは満たされていると思います。また、この本は既存の出版物の何れかを無用の長物にするものではありません。「何についての本か」の所で述べたように、物理学の専門書(教科書など)で常に扱われる多くの問題について、本書は言及しないからです。創出のみを競い、(市場の)